

グローバル化を考える

グローバル化の進展により、住民、生活のあらゆるところに様々な影響が及ぶなか、自治体職員にも、国際的で幅広い視野に立って状況を読み解くことが求められています。こうした状況を受け、今号から、「グローバル化を考える」と題した新企画をスタートします。第1回目の今回は、女性狂言師として、日本古来の伝統芸能である狂言を受け継ぎ、現在では海外公演や外国人への指導にも携わる十世 三宅藤九郎氏から、本質を変えることなく、時代の変化に対応しながら未来を見据え歩みを進める姿勢について、ご寄稿いただきました。

狂言の“笑い”で世界を繋ぐ ～伝統とは未来を拓くイノベーション～

和泉流狂言師 十世 三宅藤九郎



はじめに

「真にインターナショナル（国際的）であるということは、とことんどメスティックであることだ」とは、アメリカに永く住む友人の言葉である。とすれば超ドメスティックな日本の伝統芸能・狂言は実はとてもインターナショナルであり、加えて海外では「グローバル・ヒューマニティを持った芸能」とも評されている。

神事から発し、室町時代に生まれた日本固有の喜劇。それが海外で上演され外国人が鑑賞する、ましてや演じることまでも想像した日本人が、当時どれだけいただろうか。

国際化やグローバル化から最も遠いところにあると思われる狂言だが、そうではない。そもそも長い歴史を顧みれば、様々な時代や社会体制の変化の波にさらされてきた。伝統を守りつつ、自らの本質を変えることなく変化を受け入れ生き延びてきた姿は、むしろイノベティブである。

狂言とは

ここで狂言についておさらいすると、まず今から約600年前、室町時代に成立した言葉としぐさからなる日本芸能の原点と言われる“喜劇”である。平成13(2001)年にユネスコの世界無形遺産に登録（能楽：能と狂言の総称）され、その価値評価は残念ながら日本にあってより海外で高いものがある。

また狂言は日本の伝統芸能の中で唯一素顔

で演じるものとして、現代の感性がそのまま表現される優れた舞台芸術でもある。例外的に仮面（面：オモテという）をつける神仏・動物なども一見無表情に見える能面とは違い、狂言面は喜怒哀楽の表情を豊かに備えている。セリフは基本的に室町時代の日常語だが、舞台言語として磨かれたアクセントの正確さが言葉の正しい理解と想像を生み、日本語の美しさが文字の上だけでなく、何百年たった今日でもその響きとともに生き生きと伝わってくる。

こうした言葉や表情・所作にいたるまでの実に豊かな表現と、その表情が言葉を超越して理解される素晴らしさは、狂言に携わる者の心の表現・心の味付けである。何よりそこには人間に対する温かな眼差しと大らかな笑いが不可欠である。



海外公演では必ずと言っていいほど上演される狂言『棒縛』
(左より)筆者、史上初女性狂言師・和泉淳子、二十世宗家・和泉元彌

狂言の流儀～和泉流

現在日本に存在する狂言の流儀は、大蔵流と和泉流の二流である。

和泉流は後花園天皇の御代に京都山科で発祥し、近江源氏の佐々木岳楽軒を流祖とする。父・先代十九世宗家和泉元秀の跡を二十世宗家として弟の和泉元彌が継承し、本年で579年を数える。

狂言に限らず能楽の諸流には宗家（＝家元）があり、流儀の歴史そのものである。宗家が途絶えると流儀も断絶してしまう。明治時代初期まで存在していた驚流は、宗家継承者の早世により今日では郷土芸能として佐渡市と山口市にその姿を留めることとなった。なお宗家以外にも一代で志を立て宗家入門し狂言師になる者もあり、そこから代を重ねた職分家（＝弟子家）と言われる家々もある。私が継承する三宅藤九郎家は、江戸時代には加賀藩前田家にお手役者（お抱え狂言師の意）として迎えられた和泉流の職分筆頭の家である。

女性狂言師の誕生

和泉流の決まりを定めた流是に「女人禁制」の定めはない。しかし、これまでプロの女性狂言師は存在しなかった。所謂ガラスの天井だろうか、女性に対してはもちろん女性狂言師を育てようとする男性にとっても困難な環境があった。その中で先代宗家は「現代社会にあっては男性、女性という前に一人の人間として、“人間狂言師”を育成する」「女性でもきちんと修業をすればできる」との信念を持ち、歴史上初の女性狂言師となる姉・和泉淳子と私に男性と変わらぬ、むしろ女性だからこそ失敗すれば後はないと、より厳格な修業の機会を与えた。

狂言師の家に生まれると、修業は幼い頃から始まる。殊に宗家では1歳半から稽古を始め、おおよそ3歳で初舞台を踏む。私は父の指導のもと2歳半で初舞台を踏んだ。プロになるための大曲「奈須與市語」を12歳、「三番叟」を14歳で、また21歳で秘曲「釣狐」を披いた（披

く＝特別な演目を初演する）ことも弟子家の男性より早い修業過程であり、和泉流の現行曲（レパートリー）254曲のうち100曲演じられればプロとして差し支えないところを約180曲伝授されている。

大曲・秘曲と称される演目を披く時も、日々どんな舞台を勤める時も「人間狂言師」として最善を尽くせば、芸の前では男女の違いも個性でしかない。演じる側だけでなく、観る側にとっても重要なのは本質たる芸である。

現在でも男女共演の舞台は和泉流宗家しか行っていないが、女性狂言師の登場により観客の層が広がり、閉鎖的と思っていた狂言の見方が変わったという声や、伝統芸能で女性が活躍することは他分野の女性にも力となるとの意見もある。伝統を守るべく男女の別なく芸を伝承したことが、狂言の新たな未来と可能性を拓いたと確信している。

日本の狂言を世界のKYOGENに

狂言の未来を考える時、もう一つのキーワードが「日本の狂言を世界の KYOGEN に」である。昭和63年、日中国交正常化15周年記念の北京公演に始まり、これまで13カ国30都市余で公演を行った。アジア・ヨーロッパ・北米いずれの国でも、狂言は言葉や文化、様々な違いを超えて楽しまれてきた。伝統的な演目を日本語でそのまま演じていても必ず同じ場面で笑いが起こる。国際交流において笑いを共有することは非常に有意義であり、幸せなことだ。狂言の描く普遍的かつ肯定的な人間性



ファーゴ空港・KYOGENの舞台広告の前で（左より）和泉節子、筆者、和泉元彌、ノースダコタ州立大学教授・リフトン氏

—喜びや逞しさは、グローバルヒューマニティと言われる通り人間の根幹である。

だからこそ言葉がわからなくても楽しめる演目を選び、必要に応じて自らの言葉（使用言語は英語）で解説を行えば、狂言の芸術性も笑いの心もしっかりと伝わる。そこに異論はなく、それが現在も海外公演の主流である。

英語狂言が示すもの

伝統芸能の世界において、何か目新しいことを為すことは第一義ではない。女性狂言師も時代の流れの中で生まれたと言ってよい。何事も扉が開くきっかけは、内圧の場合もあれば外圧の場合もある。

平成23年、米国ノースダコタ州立大学 (NDSU) から招聘を受けた。アメリカ人の大学生に英語で狂言を教え、公演を行えるレベルにして欲しいという。「狂言の歴史的な価値だけでなく、英語で上演することによって今日のアメリカ人にも内容全てを楽しむことができる、生きた演劇としての魅力を知らしめよう」と



ノースダコタ州立大学ワークショップシーズン



「構工」(腰を下げて重心を低くし、下半身を安定させる基本姿勢)を学ぶ

の意気に感じ、英語狂言を制作した。このNDSUにおけるWokashiプロジェクトは、大学のレギュラーカリキュラムに日本の伝統芸能を採り入れた全米初の事例である。

言語以外は全て伝統に則って指導を行った。言葉だけを訳したのでは演じることはできない。例えば有名な狂言「^{ぶす}附子」の一節である「扇げ、扇げ。扇ぐぞ、扇ぐぞ。」という太郎冠者と次郎冠者の掛け合いは「Fan, fan! I'm fanning, I'm fanning!」といった具合に、言葉の響きや抑揚、間といった部分はそのままに言語を置き換えていく。何を生かし、何を捨



アメリカ人大学生による英語狂言。会場入口に並ぶ観客
Photo by Michael Benedict, courtesy of the NDSU Division of Performing Arts



ドレスリハーサル
Photo by Michael Benedict, courtesy of the NDSU Division of Performing Arts



英語狂言「KAMINARI ~ Thunder God」
Photo by Michael Benedict, courtesy of the NDSU Division of Performing Arts

てるのか。この依頼がなければ進んで制作はしなかったであろう英語狂言は、狂言が伝える技と心に新たな形で出会う契機ともなった。

アメリカの若者が、室町時代から続く口伝による稽古を重ねる。言語は自分たちの母国語である英語なのにもかかわらず、一言一句を師匠からの口移しで体得しなければならない。そこに「型」の持つ英知がある。この稽古を体験したことで、彼らが狂言の持つ日本芸能の精神性に一瞬とはいえ到達していたことは、大きな驚きであった。言語を変えたことで、彼らは狂言の本質に近づいた。

シェイクスピア劇が各国の言語でどのような演出で演じられようとも、本場が英国であることは揺るがないのと同じく、狂言の歴史と伝統が日本から離れることはない。

平成27年から日本でも英語狂言を上演し、在日米国大使館で公演の機会を得た。「日本語で上演することが最も美しく正しい形であると理解しているが、我々 English speaker に扉を開いてくれたことに感謝する」との謝辞と会場に響く笑い声に、狂言がまた一步、広い世界に歩みを進めたことを実感した。



米国大使館での狂言公演（平成28年2月）

結びに

伝統と革新は常に表裏一体である。伝統という基盤があればこそ、新たな可能性が革新という形で現れる。

女性狂言師という革新的に見える存在であっても、立脚するのは伝統的な修業でありそれにより培われた技術と見識である。グローバル化を考える時に拠る所となるのは自分の内側にあるものにほかならない。日本の伝統芸能であっても、これからも時代に新たな可能性を提示される時が来る。その時に試されるのが、可能性に挑む柔軟性と自らの本質を見極める力である。狂言師らしくイノベティブにポジティブに、伝統を未来へ伝えていくこととしたい。



著者略歴

じゅっせ みやけとうくろう
十世 三宅藤九郎

狂言和泉流十九世宗家故和泉元秀の次女。江戸時代、加賀藩前田家のお手役者であった名家・三宅藤九郎家の十代目当主。2歳半で初舞台。大曲「奈須與市語」を12歳、「三番叟」を14歳で披き、15歳で祖父・人間国宝故九世三宅藤九郎の指名を受け名跡継承。国内公演はもとより海外公演も13カ国30都市に及ぶ。平成24年米国ノースダコタ州立大学より客員アーティストとして招聘され、英語狂言プロジェクトの指導並びに芸術監督を務める。平成25年英国リンカーン大学“Women in Asian Theatre Symposium”で講演、平成26年・28年には内閣府対米広報事業のため渡米、広く世界へ狂言を発信している。